

エジプトにおける東南アジア留学生の歴史とイスラム復興運動

國谷徹

エジプトの政変は東南アジアのムスリムにとって、恐らく我々が想像する以上に身近に感じられたのではないか。カイロのアズハル大学にはインドネシア、マレーシアからそれぞれ数千人の留学生が在学している。両国にとってエジプトは最大の留学先の一つなのである。今回の事件に際しても、インドネシア・マレーシア両国政府はそれぞれ自国の留学生を安全のために一時帰国させる措置を取った。本稿では、留学を通じた東南アジアとエジプトの関係の歴史について述べてみたい。

東南アジアからエジプトへの留学が盛んになったのは 20 世紀の初頭、特に 1920 年代のことである。1904 年にオランダの外交官が視察した際には、アズハル大学にオランダ領東インドからの留学生 14 人が在籍していたことが報告されている。一方、ウィリアム・ロフの研究によると、1920 年ごろにはマレーシア・インドネシアからの留学生は 100 人弱、1925 年には 200 人以上に達し、同年には彼ら留学生の互助組織も設立されたという。

それまで、イスラム諸学を修めようと志す人々が目指したのは、もっぱらイスラムの聖地メッカ・メディナであった。遅くとも 18 世紀ごろには、著名なウラマーに師事すべくマレー世界の各地から聖地へ向かい、やがて自らもウラマーとして名をなすに至る人々が多数現れていた。ところが 1920 年代以降、メッカに代わってカイロへの留学が注目を集め始めた。これは、カイロへの留学がより新しく、魅力的な経験をもたらすものであったためである。当時の中

東は、第一次世界大戦といわゆるアラブ反乱、そして 1924 年にはサウード王家によるメッカ占領といった激動の中にあつた。そんな中、当時のあるインドネシア人留学生によれば、「メッカでは宗教しか学ぶことができないが、カイロでは政治についても学ぶことができた」のである。

彼らが学んだのは政治だけではなかった。当時エジプトは、ラシード・リダーらが発行した雑誌『アル・マナール(灯台)』を中心として、いわゆるイスラム復興運動の中心地であった。ナポレオンの侵入以降、急激かつ直接的に西洋列強の脅威にさらされたエジプトでは、19 世紀末以降、イスラムの復興によって西洋に対抗し、自立と発展を勝ち取ろうとするイスラム復興思想が生まれた。アフガーニーやムハンマド・アブドゥによって提唱され、アブドゥの弟子ラシード・リダーらが広めたこの思想は、イスラム世界が西洋列強の支配下に置かれているのはムスリムがクルアーンの教えから逸脱し墮落したためであると論じ、クルアーンへの回帰・信仰の純化を説くとともに、理性的思考によるイスラム法の再解釈を主張し、近代社会に適合し得るイスラムのあり方を模索するものであった。当時カイロはイスラム世界における出版の中心でもあり、この思想は広範な影響力を持った。

東南アジアからの留学生もこのイスラム復興思想に多大な影響を受けた。当時インドネシア人留学生との関わりが深かった人物の 1 人にタンターウィー・ジャウハリーがいる。彼はインドネシア人学生の

受入れ・指導に熱心で、留学生の集会にもしばしば出席し、留学生らの尊敬を集めていたという。当時エジプトを代表するクルアーン解釈学(タフシール)の専門家であったタンターウィーは、「科学的クルアーン解釈」なる方法を提唱し、西洋近代の科学や技術の発展は全てクルアーンの中に既に示されている、との論によって近代科学の導入・近代化の推進を主張した人物である。つまり、西洋の近代文明はもともとかつてのイスラム文明の成果を継承して発展したものであるし、近代科学の知見は全てクルアーンにおいて予見されている。従って、イスラム世界は西洋近代科学の成果を取り入れることで西洋に対抗し、発展への道を歩むべきである、という思想である。タンターウィーの著作は東南アジアのいわゆる近代派、カウム・ムダの間で広く読まれたといわれ、ムハマディアに代表されるイスラム近代主義運動に大きな影響を与えたと思われる。ちなみに、ことイスラムに関しては極めて疑り深いオランダ植民地政府は、彼の著作が植民地のムスリムの間に論争を引き起こすことを恐れ、その植民地における出版・流通を禁止した。

以上のように、20世紀初頭、東南アジアからの留学生がカイロで学んだことのうち、最も重要であったもののひとつが、ラシード・リダーやタンターウィーらのイスラム復興・改革思想であった。その影響は、東南アジアにおいても、ミナンカバウで発行された雑誌『アル・ムニール』を皮切りとするイスラム系出版物を通じて広まった。

当時のエジプトにおけるイスラム復興・改革思想は、最終的な目的としては西洋列強への対

抗を目指し、そのための手段としてイスラムの価値観の復興によるイスラム世界の再活性化を主張するものであったが、これに対して、エジプトよりも早くから植民地化されたマレーシア・インドネシアにおいては、西洋への対抗という側面はあまり強く主張されず、むしろ、近代化・「発展 (kemajuan)」とイスラムの価値観との調和を唱える論調が目立った。ある意味では、東南アジアの人々はエジプトからのイスラム復興思想をより柔軟に解釈し、受容したとも言える。現在においてもなおエジプトがマレーシア・インドネシアからの留学生を多数引き付けているのも、ひとつにはこの、「西洋化・近代化とイスラムの価値観をいかに調和させるか」という問題が現在でもなお重要性を失っていないためではないかと考える。